肥後　どうなんですかね。

おか　プロダクトデザインを最初に選んだということが、意味があるんじゃないですか？

肥後　高校のときは普通の四年制大学、理系の大学に行こうかなって思ってて、ギリギリになって芸術大学っていうのがあるって知って、行きたいなって思って。その時にはときすでに遅しでデッサンとかやる暇もなくて。

おか　芸術大学がいいなって思ったときは高校三年生のときですか？

肥後　そうですね、芸術大学っていうのがデザインとかテクノロジー的なものに興味があって、かたちがかっこいいとかメカニックなものが好きとかいうそういう延長だったと思うんです。

おか　そういうところに行こうと思ったのは何月くらいだったんですか？

肥後　一年は切ってたなと思います。

おか　その時にもうそういうところに行ってみようと思ったんですか？

肥後　行ってみようと思いました。

おか　デザイナーとかプロダクトデザインとかそういうのを目指して。

肥後　そうですね。

おか　それで大学受けてやっていったら、ちょっと自分の中で違うなと思ってきて。今やってる作品というのは、これがあったからこそ延長線上で繋がっているということなんですね。

肥後　そうですね。

おか　面白いですね、そういった意味でいうと、プロダクトデザインからまたこっちにいってるというのがね。

肥後　プロダクトで教えてもらったことは今役立ってますし、よかったなと思ってます。

おか　すごいなー。よかった、プロダクトデザインの人がこの中にいなくて。やっぱり役立つもんですね。ありがとうございました。続いて、森井さん。森井さんのターニングポイントはなんでしょうか？

森井　「就職活動」です。皆さんと比べて、すごい現実味を帯びたワードなんですけど。就職活動がターニングポイントで、私が大学二年生の後半くらいから進路は大学院に行くと決めてたんです。自分は大学院に行くと思いながら過ごしていたんですけど、だいたい三年生の最初か中間あたりに大学のクラスの中で、クラスメイトを集めて、先生が「この中でアーティストになりたいやつ手を挙げて」と仰ったんですよ。私はそこで手を挙げれなくて。そのあと先生が仰ったのが「ここで挙げれないやつは、アーティストになんかなれないよ」って仰ったんですね。結構その言葉がずっと絵を描いてるときでも頭の片隅にいてて。アーティストになるっていうことの質問に対してその時は割と否定的な言葉でしか返せてなくて。それでも絵は描くっていう状況が四年生の最初あたりまで続いていて。それもあってか分からないんですけど、絵の方もあまりうまくいかなくて。やっぱり大学院はアーティストになるために行くものだと思っているので、このままの状態で行っても自分はもったいないし、絵を描くのも若干苦しかったので、苦しい思いをしたくないっていうのもあって、そのときはちょうど八月あたりのピークだったので、就職活動をしようと。

おか　そこから？二年生のときにそういうことを考えながら、実際には夏から？

森井　急に気分が落ち込んじゃって。通常就活は三月から始まると思うんですけど、私は夏休み明けての九月の中盤あたりから就職活動を始めました。そこで結果的に言うと、就職活動は私の場合は絵画なんですけど、終わりの見えない、完成が…、っていう感覚があるじゃないですか。いい仕事をしたって思っても、次の日朝起きて見たら「なんじゃこりゃ」みたいな。それでずっと見えない出口を永遠と探ってるっていう表現活動に対して、就職活動はエントリー受かりました、第一次受かりましたって明確に結果が来る訳ですよね。自分は人生を歩んでいるなと思って。

おか　実感はそこに湧く訳なんですよね。

森井　湧いて、正直気分的には楽でした。九月っていうと、大学の卒展は二月の九日から始まるので、周りはみんな卒展に向けて作品を描いてたりするんですけど、私はその中で、まだ下地も生乾きのパネルと…進行度が一割にも満たない作品を横に、エントリーシートを書いていて、その中で就職活動をしていたんですけど、就職活動してて志望動機とか考えたり、企業から来る返事のメールにどうきれいな文書で返そうかなとかその意識を一日の大半に使っていて。気持ちは人生が進んでいるっていう意味では楽なんですけど、漠然とその生きた心地がしなくて、何か欠けてるなっていう気持ちがしていて、その感じで就活はしていたんですけど、一社は落ちて、二社めの最終面接の時に社長さんにある経緯で、私は営業職を希望していたんですけど、「絵を描いている君なんかいらないからね。」と。

おか　そんなこと言う、社長さんが。

森井　まあ失礼だなと思って。でもやっぱり最終面接ですし、その時期になると応募してる会社も少ないっていうことで、「そうですね」って言っちゃったんですよね。

おか　めっちゃクールですね。

森井　多分目は笑ってなかったと思うんですけど。そうですねって言って、そんな感じで第四次まであったんですけど、それが終わってその後学校に帰ろうとしている電車の中でそのことがぐるぐる回っていて。それに対していやいるって、絵を描いている自分を捨てるってどういうことって素直に思えない自分が正直いて。そんな感じで過ごしていたんですけど、なんでか知らないですけど、そこの面接が通って採用になったんですよ。そこの第二次面接で反発意識でチャイナ服を着て行ったのに。

おか　ちょっと待って。面接の時にチャイナ服着て行った？ちなみに中国でチャイナ服を着るっていうのは正装になるんですか？

范　いや、普通はスーツですね。

おか　中国はスーツらしいよ。

森井　私服は自由って言ってたので。

おか　すごいですね。

森井　それでとりあえず一個は内定をもらってたんですけど、行きたい会社じゃないってことで、違う会社に…

おか　そこはやめたんや。

森井　そこは最終的にすみませんと。内定が一個決まってもここは行きたくないって思って違うところにはっぱかけてたんですけど、でもとりあえず一個内定が取れたって思って、ちょっと安心するじゃないですか？そこでようやく一日の意識を絵に向けることができた日があって。だいたい十一月入ったくらいで。

おか　ほんま時間ないね。

森井　ようやく絵に意識を向けることができる日があって、そこでもう絵に向き合ってみると今まで就活に費やした時間のツケが回ってきて全然できてないじゃん、何をしてたんだってなって。ツケが回ってきて頭の中で自分のことを責めていて。それが最初らへんに就活していたとき生きている感じがしないって言ったと思うんですけど、その頭の中でぐるぐるしているのがたまらなく生きている感じがして。

おか　そういうことで自分がやっと気付いたというか、やっと生きる心地ということをそこで発見したわけや。それのきっかけが就職活動ということなんや。

森井　そのおかげでそのまま三日後ぐらいにあんまり覚えてないんですけどさらーと内定蹴って、さらーとはっぱかけてた会社にやっぱり辞めます、すみませんって送って。でもなんかそうやってアーティストになりたいっていうことを、ちょっとあんまり強い人間ではないのでパッと言える人間ではなかったので、そのことが負荷になって、絵と誠実に向き合うことから逃げてた自分がいて。でもそうやってこう自分にとって表現行為はたまらなく生きてるってことを実感できる、そういう人間なんだって思って。ずっとかっこいい絵を描き続けたいか？っていう質問に対してはすぐにはいって答えられるようになったのも就職活動のおかげかなって思って。

おか　一本の映画を観てるみたいですね。でもあれじゃないですか、結局その大学三年のときにその先生が言ったことがずっと頭に残っていて、それが言うたらトラウマじゃないけどもずっとあって、最終的にそれがどっか残ってたんかもしれませんね。結局大学入った時に自分はアーティストっていうものを目指して入って来たっていう、もわーんとしたものはあったんだけど、しっかりとそこでビジョンとして確立したってことですね。で、この作品を制作したっていうことですね。

森井　そうですね。そっからが本当の地獄でしたね。

おか　十一月から掛かったんですよね。正式には。

森井　その作品はだいたい本番で始めてきたのが十二月の二十日ぐらいですね。

おか　どのくらい時間掛かったんですか？

森井　卒展が二月の九日からだったので大体二ヶ月くらいですね。

おか　二ヶ月くらいでこれをやったと。まさか就職活動がターニングポイントっていうのはちょっとすごく…皆さんどうですか？意外ですよね、そういった話っていうのは。ありがとうございました。皆さんお聞きいただいた通り、大学でこういうことを学んだり生活している中でターニングポイントがあり、現在作品制作をしていますということをご理解いただけましたでしょうか。さぁ三つ目は何をするかというと、先ほどチラっと写ったりしてましたけど、アトリエと言いま